



徳川家康をまつる日光東照宮。芭蕉は山のふもとに泊まった(栃木県日光市)。「芭蕉ドットコム」提供

新編日本古典文学全集第71巻・松尾芭蕉集②『紀行・日記・俳文・連句編』(小学館刊)から転載。校注者・井本農一、久富哲雄

奥の細道

松尾芭蕉

三
日光

卅日、日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、「我名を仏五左衛門と云。万正直を旨とする故に、人かくハ申侍るま、一夜の草の枕も打とけて休み給へ」と云。いかなる仏の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順礼ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅木訥の仁にちかきたぐひ、気稟の清質、尤尊ぶべし。



古典の日

あらたうと 青葉若葉の日の光

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此御山を「二荒山」と書しを、空海大師開基の時、「日光」と改給ふ。千歳未来をさとり給ふにや、今此御光一天にかゝりて、恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩也。猶憚多くて、筆をさし置ぬ。

晩春から初夏へ

芭蕉の江戸出立の日は弥生の末、過ぎ去ろうとする春を惜しんで、鳥は空に、緑の木々に鳴き、水あふれる池や川の魚たちは目いっぱい涙をたてる。行春や鳥啼き魚の目は泪。空と水、天と地とが渾然と一つになった、まるで神話か童話のような世界である。緑のうらおいに溢れる天地のなかに、鳥魚の悲しみの声と涙に送られ、みずからも惜別の涙でそれに答えながら、芭蕉は「耳にふれていまだ目に見ぬ」奥羽の歌枕巡礼へと旅立った。芭蕉の旅の足は早い。子住から日光街までとって、草加、粕壁、歌枕の室の八島などをへて、四日目の昼にはもう日光山麓、東照宮門前の町についていた。その日の午後、紹介状によってさっそく東照宮の壯麗を拝観。だがまず、その夜の宿の主人五左衛門の「正直偏固」ぶりを語るの面白。ただの「無智無分別」の田舎おじかと思っただけで、論語の「剛毅木訥、仁近シ」の言葉のとおり、それは真に純一無雑の人柄だった。私が仮のすがたで僧形の旅人芭蕉の前にあらわれたかと思われた。

翌日(陽暦五月十九日)は、曾良の随日記によれば「天気快晴」。その爽やかな光のなかに仰ぎ見る黒髪御山男体山は、もと二荒山と呼ばれた霊山であったが、空海大師が後にこれを日光山と改め、さらにここに東照宮家康公の霊が祀られた。この神仏の威光と恵みはいまや全国土にあまねく、四民の平安をもたらしていることを、芭蕉は語を畳みかけるようにして讃える。そしてふと口をつぐんだ上で、諸曲風「あらたうと」の感嘆詞を枕に――

あらたうと青葉若葉の日の光
能舞台に笛と鼓が一声にひびくような強さ、美しさ。霊山の山腹の広大な針葉、闊葉の森が、初夏の光と風のなかにいっせいに揺れさめく。神域の青いかがやきが眼に迫るような一句ではないか。

おくのほそ道

芳賀徹さん とたずねる

能楽で得た精神的豊かさ

中学時代からバレエ・ピルに熱中していた私に、父が「謡をしてみなしか」と誘ってきたのは



京都商工会議所会頭 立石 義雄 さん

もななく能の世界に入り込み、大学卒業年度で能楽「舞丸」のシテ逆髪を演じることが出来ました。

「京都 知恵と力の博覧会」では、オール京都の協力はもと800にも及ぶ、600年の伝統に自らが今つながっているような不思議な思いを抱き、小倉百人一首、平家物語、源氏物語などの古典を思い起こしながら、1200年の歴史の中で培ってきた人々の生き方や、まちのあり方に込められた知恵を学ぶとともに、未来の京都の知恵産業づくりに活かしていきたいと考えています。

親しむ



上賀茂神社境内を流れるならの小川(京都市北区)

文学ウォーク

世界文化遺産である賀茂別雷神社(上賀茂神社)の本殿に参拝した後、境内を流れる御物忌川と御手洗川に沿って歩くと、川幅は広くなり、ならの小川となります。その川のほとりに、小倉百人一首に収められている「風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしなりける」(藤原家隆)の歌碑が建っています。小川とは言っても水量も多く、流れも激しく、周りを木立に囲まれていて、夕暮れともなると夏でもどこからか涼しい風が吹いてきます。

上賀茂神社から南西に2キロほどの紫野に雲林院という寺があります。今は小さな寺ですが、平安時代には淳和天皇の離宮(紫野院)があった所で、広大な敷地

古典文学・文化を広めようと、古典の日推進委員会は11月1日を「古典の日」と定めた。

仮名文字の美しさ 鑑賞できる百人一首歌碑

下がるとうれしい成績があります。

いつもは上がると嬉しい成績。ですが中には例外があります。たとえばエネルギーの使用量。設定した目標を下回るほど、それは大きな成果です。使ったエネルギー量が見えれば、ムダ遣いにハッキリ気付く。子どもたちに環境意識も芽生え、身近なところで自ら行動してくれる。オムロンはそう考えました。

オムロンは、独自のセンシング&コントロール技術を駆使し、エネルギー消費の「見える化」で環境活動に貢献します。

オムロンの電気使用量監視システムはすでに京都市立の幼稚園、小中高等学校の全283施設に導入され、省エネ活動の定着と推進を行うと同時に、初年度で約4,000万円の電力コストの削減に貢献しました。

みんなの地球のために。

安心をカタチに 検索